

民国初年のアナキズム

——劉思復の社会主義論——

川上哲正

既に筆者は、「劉思復と辛亥革命」⁽¹⁾に於いて、劉思復（師復）のアナキズムへの傾倒が彼のテロリストとしての体験に根ざしたものであることを述べた。いっさいの政治権力を否定する思想は政治的現実をかくぐった者に宿る。辛亥革命の政治的現実⁽²⁾に身を投げ出した者にこそ、いっさいの政治権力を否定する思想が、純粹にはとばしるのである。アナキストとしての彼は、民国成立後、一種殉教者の出立で社会革命の実践に乗り出す。それは、孫文ら中国の政治的現実⁽³⁾に密着して中国革命をきりひらいていった者たちとは異なる道であった。彼の創設した晦鳴学社や心社といった結社は少数派であつたが民国成立後の政治的社会的状況を西欧資本主義社会に擬し、世界革命を展望していたのである。彼の現実認識はあまりに主観的かつ楽観的であつたかもしれない。しかし、彼は自らの「主義」に生きようとした。彼のアナキズムはこの倫理性に支えられていたのである。それゆえ、アナキズム

の啓蒙・宣伝活動の一環として彼が当時の社会主義論を取り上げる場合、啓蒙者としての立場からのみならず、思想の実践者としての立場から批判がなされたのである。

さて、辛亥革命期に於ける西欧社会主義の受容は「社会主義を権力奪取の闘争の加速剤としてもちいようとした」⁽²⁾傾向が強かつた。そのような風潮に対して、例えば、宋教仁は、「社会主義商榷」⁽³⁾に於いて、社会主義を 一、無治主義（無政府主義） 二、共產主義 三、社会民主主義 四、国家社会主義の四派に分類し、「私は社会主義に反対する者ではない。私はただ、およそ一主義を唱えるならば、その主義自体の性質と作用をつまびらかにし、更に、その客体事物の現状を分析して、将来受ける結果を推定せねばなるまい」と述べている。宋教仁にとつて、社会主義が中国の将来を托すに足る理論であるかどうか疑義が残るのであり、特に一と二の理論を「真正の社会主義」としながら、現存社会を全的に破壊

変革するとき、後進国たる中国は全くの「無秩序な世界」と化すであらうことを危惧するのである。それゆえ彼ら政治的指導者は、政府が資本主義社会の矛盾を予防・解消する政策を施行することこそ、中国の政治的社会的状況を好転させるとみなし、国家社会主義的傾向を選択していったのである。

しかし、民国初年の段階で、中国の知識人は正當に西欧社会主義理論を充分、了解しえていたわけではなかった。そこには様々な混乱・錯誤が充満していたことは事実である。直接輸入であれ、附会であれ、西欧社会主義に対する幻想から、様々な社会主義理解がなされたのである。いまここでは劉思復の孫文・江亢虎・社会党批判を取り上げる。それは当然、中国知識人の西欧社会主義受容の現実を垣間みることにしろ。

一 孫文批判

孫文の民生主義はいわば中国の社会的政治的現実に立脚して、先進諸国が陥っている資本主義社会の矛盾を未然に防ごうとするところで発想された独自の理論である。劉思復は「孫逸仙江亢虎之社会主義」（『民声』第六号、一九一四・四・十八）に於いて、孫文理論に対するアナキズムの側からの批判を展開する。

孫氏は本来政治革命家であり、社会主義に通じているわ

けではなく、ただ、ヘンリー・ジョージの単一税論に心酔し、これを中国に実施しようとしているのである。同盟会綱領の「平均地権」がこれである。だがこれは一種の社会政策であって、社会主義ではない。社会主義は共産たると集産たるとにかかわらず、富人の手から全ての土地・機械を撰取して公共に帰し、社会上に地主と資本家の跡を止めないことにある。単一税制は僅かに大地主を限定してその勢力を軽減するだけで、消滅させることはない。

孫文の「平均地権」が社会政策にすぎないと断言した後、中国社会党での演説を取り上げ、マルクスの「集産主義」と「平均地権」を結合すれば理論的矛盾を生ずると述べる。

孫氏は社会政策を誤認して社会主義とし、社会政策の所謂国有事業を誤認して社会主義の資本公有のこととしている。（中略）社会主義の資本公有とは生産機関を直接生産者の手中に下ろすことであり、資本の力をあらわにしないことである。国有営業は生産機関にかこつけて労働者の利益を剝奪し、資本（家）勢力をかえってますます膨張させるものである。両者の学理上の背馳はこのようなものである。孫氏が鉄道及び営利事業を国有に収めて資本問題を解決したとし、公有と異ならないとしているが、これは「資本」の意義を知らないだけのことである。孫氏という集産

主義とはこのことに他ならない。(中略)マルクス氏は資本公有というが、土地公有はその内に包括されているのであり、土地も生産機関のひとつなのである。およそ集産家は土地公有を主張する。所謂公有とは土地を直接生産者の手に帰すことである。単一税はただ地主と山分けして税金を取って土地公有と名付け、国有と名付けているにすぎず、政府と地主の分有というべきである。孫氏が土地問題を解決できるとするのは、所謂公有の意義を知らないのである。

孫文の「平均地権」「資本国有」とは、西欧近代の苦悩を中国で再びくり返さないために創られた概念であった。その意味で、孫文という「中国的一現象」⁽⁵⁾に於いて語られた民生主義は、中国近代の社会的現実に着した理論であったといえる。中国の政治の現場にいた孫文は、政策として社会主義の効用は説いても、決して、西欧社会主義の理論を直輸入することはしなかった。しかし劉思復は、孫文理論の一貫性に敬服しつつも、あくまで孫文理論を西欧社会主義の学理の場に引き出し、その独自性を理論的欠陥とみなし、批判した。彼にとって孫文とは一個の政治革命家にすぎず、社会主義とは侵すことの出来ない理論的完成体であったからである。

二 江亢虎批判

江亢虎は辛亥革命勃発後の上海に於いて中国社会党を発起

し、西欧社会主義思想を中国に導入・紹介した人物のひとつである。彼は辛亥以前、康有為の『大同書』に接したり、日本留学中に社会主義を受容し、社会主義こそ「二十世紀最流行の主義」であると認識した。しかし、革命以前に社会主義を唱えることは危険であるとの判断から、社会主義の要素を盛り込んだ三無主義(無国家・無宗教・無家庭)を標榜、宣伝した。三無主義はアナキズム的色彩を帯びているが、所謂アナキズム思想の革命手段である暗殺・暴動・破壊といった強硬手段には反対した。一九一一年、世界一周から帰国後、個人会を発起、杭州で「社会主義与女学之關係」を講演して浙江巡撫増韞から退去を命じられる。そこで上海に逃れ、七月、張園で社会主義研究会を発起、この時入会した五十人程が後の中国社会党結成に参画する。かくして上海独立後の十一月五日、中国社会党を発起する。その党綱は「一、共和に賛同する 二、人種(種界)を融化する 三、法律を改良し、個人を尊重する 四、財産世襲制度を打破する 五、公共機関を組織し、平民教育を普及する 六、直接に利益を生む事業を振興し、勞工を奨励する 七、専ら地税を課し、他の税はおおむね免税する 八、軍備を制限し、軍備以外の競争に努める」⁽⁸⁾とある。この党綱は民国成立後の政治・思想状況に対応して、様々な階層の人々の賛同者を得た。江亢虎は共和政体を擁護し、孫文の民生主義にも賛同して、孫文の支持をとりつけた。しかし、孫文が南京臨時政府を去ると、中

国社会党は苦境に立たされるのである。一九一二年五月には湖南都督譚延闓による湖南支部封禁事件が起る。江亢虎は五月より八月まで、袁世凱・黎元洪らに書簡「社会党有益国家説」を送る。その内容は、革命を予防すること、臨時約法に於ける財産所有の自由と抵触しないこと、国家存在を否定しないことを言明している。湖南事件後は袁世凱・黎元洪と直接交渉を進め、六月北京に飛び、更に長沙で、譚延闓とも会見する。かくして中国国社会党は袁世凱の御用政党となった。

既に江亢虎は四月、「中国国社会党重大問題」⁽⁹⁾に於いて自ら「純粹社会党」であり、「完全政党」であつてアナキズムではないことを述べ、七月には国家社会主義を主張、十月下旬の中国国社会党第二次連合大会後に於いて「社会党党员之心得」⁽¹⁰⁾を發して、国家存立を妨害しない範圍で活動すること、遺産帰公を強制しないこと、無政府主義はあくまで言論上に限定することを強調する。当時、アナキズムの立場をもつ党员も多く、国家社会主義とアナキズム派に分裂する。沙金らの社会党が發起されるのは十一月二日のことであつた。江亢虎は袁世凱との接近を深め、一九一三年三月の宋教仁暗殺事件、八月の二次革命にも超然とした態度をとるが、陳翼龍ら北京部の活動に対して袁世凱は弾圧に出て、ついで一九一三年八月十三日、中国国社会党は解散させられ、江亢虎はカリフォルニアへ亡命するのである。

劉思復が中国国社会党及び江亢虎に対する批評を行なうの

は、中国国社会党解散後、すなわち、一九一三年八月二十七日、『晦鳴録』第二号「政府与社会党」に於いてである。ここでは、袁世凱政府が、前年十二月以来、僅か八ヶ月ばかりの間に、二度にわたつて社会主義を標榜する党派を解散させ、「虚無党と連絡して事を起そうとしている」との罪をかぶせて陳翼龍を処刑し、「文明国」と称して実は中国を野蛮国に仕立て上げていることに對する憤怒と諸虐とを表明している。そして「附注」のかたちで中国国社会党、社会党に對する批評がなされるのである。

では、なぜ「一字の貶語も述べなかつた」劉思復が江亢虎批判を行なうに至つたのか。⁽¹¹⁾

私が「中国国社会党」に不満なのは、ただ党綱が完全でなく、党綱と党論が矛盾しているからである。かの江亢虎先生は政府に迎合するゆえに主張を明瞭にすることが出来ない。提唱者の主張が不明瞭であるから、世人の社会主義に對する正当な解釈もまた模糊とした影響の弊害を受けざるをえない。これは社会主義を擁護するための苦衷であつて決してその党に對する排斥のためではないし、更に個人に對して誹謗しようというわけでもない。中国国社会党が發起されたとき、私は大いに歓迎し、共に党事を進めようと考えたが、ただ党綱が意を尽していないので果せなかつた。しかしながら党の同志とは絶えず通信往復していた。二年

米、論文を載せ、私見の及ぶところで党綱の不備を詳細に批判しようとしてきた。社会党の三字が中国に方に芽萌えようとしているときに、一旦異議が出ては、知らない者同志で攻撃しあい、伝播と進行に於いて或は妨げとなりかねない。それゆえずっと旧文を発表してこなかったのである。

劉思復が江亢虎批判を行なうようになったのは、中国社会党解散後のことであつた。彼は中国に西欧の社会主義思想が正當に理解されるために、江亢虎批判を不可欠とみなした。そして、そこに至るまでの苦衷を上述のように語つたのである。彼の批判文の主要なものを順次要約して検討したい。

1、「孫逸仙江亢虎之社会主義」(『民声』第六号、一九一四・四・十八付)

江亢虎は「共產主義は社会主義の中堅」「社会主義の不祧の宗」と認識しながら、「共產主義の精言は各々能くする所を尽し、各々需める所を取るの二語に他ならないが、徒に需める所を取り、能くする所を尽さない者に対してはどうすることもできない」と「共產主義」に対する否定的評価を下す。劉思復は江亢虎の卑俗な「共產主義」理解を「共產主義の真諦」を知らないと断じる。劉思復ら近代アナキストにとって「生産機関と生産物の全てが共有なのが共產であり、生

産機関が公有で生産物が私有なのは集産主義である」はずだが、江亢虎の「共產主義」は思復のいう「集産主義」にすぎない。そして江亢虎は「均産・集産は尽善の法ではない。共產もまた遽には施行しがたい」として「社会主義各派を一律に否定」した。江亢虎ら中国社会党の党綱にある「營業自由、財産独立、專徴地稅」は私有財産制度を容認している点で、もはや社会主義とはいえないのである。やや資本主義体制と異なる観点は党綱の「遺産帰公」だが、それとても「無限の欲望を絶滅させ」はせず、「特殊な社会政策」であつて、社会主義ではないとする。

孫文と比較しても、孫文の場合は自らの立場を明確に主張してその宗旨は一貫しているが、江亢虎は社会政策を社会主義といいくるめ、袁世凱が実権を掌握すると、彼に上書したりする。「本党の宗旨は国家社会主義に違反せず、無治共產主義に達しうるとみなすのであり、本党の性質は政党ともいえるが、政党でないともいえる」などと、曖昧な言辞を弄して人を欺いている。その点で「孫氏に比べてはなはだ下劣」と評価を下すのである。

2、「答李進雄」(『民声』十一・十二号、一九一四・五・二十三及び三十付)

江亢虎は「三無」(無政府・無宗教・無家族)、「二各」(各能くするところを尽し、各需めるところを取る)、「五非」(非

私産主義・非宗教主義・非家族主義・非軍国主義・非祖国主義」を唱え、「無政府社会主義」を自称していた。一方、「無政府共產」は「施行しがたく」、「敢て深くは信じない」とも述べ、「無政府党ではない」と声明した。思復はこの矛盾を衝く。

江亢虎が「共產主義は進化を阻む」と判断するのは進化論者のいう「自由競争こそ進化の母」とみなすからで、この優勝劣敗の論理は、「相互扶助こそ進化の母」とみなすクロボトキンの適者生存の論理と背反する。思復は、クロボトキンの説に依拠して、批判するのである。

また、江亢虎が「無政治は無系統・無契約・無機関であつて、このような世界に安んじて住むことはできない」として、「官治」を排するが教育や実業に努める「自治」は認めるとしたのに対し、劉思復は無政府主義は強権の組織を排斥するのであつて、何らかの社会組織を持たないのではないこと、国家統治を排斥するのであつて、人民の自治を排斥するのではないことを強調する。江亢虎の卑俗な論法を彼は批判するのである。

3、駁江亢虎(『民声』第十四・十五号、一九一四・六・十三及び二十付)

江亢虎は「紀民声雜誌記事」⁽¹³⁾に於いて、劉思復の批判を「過去の社会党を攻撃し、出亡の鄙人を詆毀する」行為と受

けとめたが、中国社会党が解散しても江の言論と主張は残るとみる劉思復は、再三、「江氏の言論に反対するのであつて、個人に反対するのではない」として、江の言辭をとりあげつつ、反批判を展開してゆく。それに先だち、『民声』第八号以前に明らかにした批判点を確認する。

(一)江氏が資本家を打倒し土地資本を回収して、これを社会に帰することを主張しないのは、社会主義の根本要義に反している。ゆえに江氏の主張は社会主義とはいえない。

(二)江氏が土地資本の公有を主張せず、ただ營業の自由、財産の獨立、軍備の縮小、地稅の專徵等を主張するのは、すべて社会政策であつて、社会主義ではない。

この二点を最も重要とみなした上で、更に三点を指摘する。

(三)江氏は共產主義を社会主義の不祧の宗といいながら、共產主義が人類進化を停滯させるといっては、賛成と反対を同時に行なう。これは当然矛盾している。

(四)江氏は共產・集産の學說を並舉して、共產主義と總稱するが、これは學派に不明なためである。

(五)江氏は社会主義の各派を挙げ(均産・集産・共產)、一律に否定し、自ら特殊な主張(全く社会主義の外に在る)を述べて、ますますその主張が社会政策であることをはっ

きりさせた。

劉思復にとって江亢虎の「純粹社会主義」や社会党の「極端社会主義」は社会主義の弁別に何ら有効ではなかった。そしてむしろ、「真正社会主義」がクロボトキンの「無政府主義は真正の社会主義である」という言葉に由来し、「完全社会主義」が集産主義という「不完全社会主義」に対応することを述べる。社会主義は決してマルクスによって完成、総括された、マルクスの「専利品」ではない。なぜなら、一九世紀末から第一次世界大戦の時代、社会民主党の立場だけが社会主義と捉えられたが、クロボトキンの立場からするなら主観的には、無政府共産主義はマルクス対バクーニンの対立を乗り越えて創造された理論なのである。無政府共産主義とは全ての財産を社会に帰すとする「共産主義」と「均しく之（全財産）を国家に帰すことを主張しない」はずの「無政府」とが結合した理論である。『叛逆者の言葉』に於いてクロボトキンは、社会主義の母胎となる思想を「給料賃金制を廃止し、土地・家屋・原料、労働用具・社会的資本の私的所有権を廃止することである」と述べているが、劉思復の社会主義理解の根底は、ここにあるとみるべきだろう。それゆえ江亢虎が「社会主義を攻撃しながら、社会主義を主張するものが、中国の無政府主義者の特色」としていることに承服できないわけである。

或は、江亢虎が字面に執着して、無政府だけでは無家庭・無宗教を包括しえないとして三無主義を唱えたり、「無治主義」が適当としているのは、江亢虎が既成用語に対して無理解であるからであり、無政府主義には、既にそれらのみならず、反軍備・反資本主義を包括する概念であることを述べる。

4、「江亢虎之無政府主義」(『民声第十・十八号、一九一四・七・四及び十一付)

江亢虎はアナキストが採用する革命方式を「強権」と捉える。それに対して劉思復は、「強権」とは自由の反対語であり、法律・章程・社会習慣で認められている一種の権力、つまりは法定権力のこととする。政府が政治力によって他者の自由を侵すのと資本家が資本力によって労働者の生産物を掠奪する行為とは、武器を使って強盗を行なうのと同じで、アナキストの抵抗運動は正当防衛なのだ。だから彼らの激烈な手段を「強権」とするのはあたらない、とする。

「機関」について、アナキストは強権をもった組織を排斥するのであって、自由に組織された機関を排斥するはずはない。一方、江亢虎がいう「機関」とは政府のことである。彼は関税を免除し、軍備を撤廃し、教育や実業に従事する政府には強権がないとしているが、劉思復は政府である以上、どのように改良し権力を縮小しようが、管理者が被管理者に職

権を行使する構造は否定しようがない、とする。

三 社会党批判

社会党は一九二二年十一月二日、中国社会党から分派した憤々(沙塗)・楽無らによって創設された。中国社会党が第二次連合会に於いて国家社会主義派とアナキズム派に分裂したとき、後者は江亢虎らの国家社会主義的傾向に反対し、「国界なし」「政府に反対する」の二点に於いて中国社会党と異なることを表明したのである。しかし袁世凱政府は十一月十三日に封禁を決定し、翌日には社会党の数十ヶ所の支部を解散させている。その後、上海に連絡所が設置され、機関誌『良心』が発刊されたらしいが定かではない。

劉思復は社会党の創設に深い関心を寄せ、憤々・楽無に入党を促されたが、ついに、参加することはなかった。彼は「兩派が互いに激しく排斥しあったことに反対であり、且つ新発表の党約も私の意を満足させなかった」と述べているが、彼にとって社会党のどの点が不満であったのであろうか。「論社会党」(『民声』第九号、一九一四・五・九付)では党綱を検討・批判している。

(一) 社会党と命名するのは果して正当か

「社会党約章」¹⁶⁾を読む限り、無政府共產主義といえるのに社会党と名乗っているのは社会主義が無政府主義を包括しようと考えているからなのだ。しかし無政府党は社会党と名乗

るべきではない。一には学理の点で、社会主義はあくまで社会的学説であって、政治的学説ではないのだから、無政府主義と混同することはできないし、社会党は治人(支配者)と被治者(被支配者)の消滅を宣言した以上、無政府党であって、社会党の三文字では包括できない。二には事実の点で、集産主義を主張する者や欧米の社会民主党が社会党と通称し、また江亢虎の中国社会党を人々が社会党と簡称している現情がある。以上二点にわたって劉思復は社会主義が正当に理解されていない中国に於いて、社会党を名乗って無政府共產主義を喧伝することは間違っていると説く。¹⁷⁾

(二) 無政府党は機関を組織する必要があるか

社会党が政党の形式をとり、章啓(約章)、党綱、入党制限、入党志願書、黨員証書、党旗、分科幹事をもつことは、無政府主義の宗旨と抵触している。無政府党の意見を宣布するには、無政府党大会を開催して事業を社会的にアピールするしかない、とする。

(三) 無政府党は党綱を制定する必要があるか

世間の政党は二・三の党魁が党綱を制定して人々に呼びかけ、多数の黨員を利用して自らの名譽をつくり、何らかの位禄にありつく手段としているにすぎない。無政府党は個々の独立人が自由に意見を發表する權利をもっているのだから、少数の人の意見によって党綱を制定したり、それを多数の人に強制したりするはずはない。その意味で所謂党綱はあるべ

きではないのだ。社会党は党綱を懸けて入党者に対し「綱目」に服従するよう呼びかけているが、これは一般政党と同じではないか、とする。

四 二綱六目の分別は果して学理にかなっているか
社会党の「綱目」(党綱)には¹⁸⁾

綱目 綱一 階級を消滅する

目 (甲) 貧富(共産の実行) (乙) 貴賤(個人の

尊重) (丙) 智愚(教育の平等)

綱二 境界を破除する

目 (申) 国(遠近なし) (乙) 家(親疎なし)

(丙) 教(迷信なし)

とある。第一綱の各「目」は中国社会党の党綱に重なり、第二綱の各「目」は江亢虎の三無主義を思い起させる。劉思復は先ず、表現様式を「文人の積習」とみなした後、四点にわたって「綱目」を批判する。

一は、「綱目」の分類に関して、である。「智愚」は比較の形容詞であって、階級には属さない。無政府主義の立場は宗教的対立をなくすことでなく、あくまで迷信をなくし自由を重んずることにあるのだから、第二綱に「教」を入れるべきではない、とする。

二は、徒に個人の尊重をいい、貴賤の差別をなくすことを

いうだけでは、無政府党の統治機関をなくし法律の束縛を受けないようはかるといふ意図をくみとることができない、とする。

三は、教育の平等と無政府共産とは並べるべきではない。つまり、共産の実行、政府の廃止こそ無政府党の根本綱領であって、そこに、教育の平等を並列させるべきではない、とする。

四は、国家の別、家族主義も「綱目」に入れるべきではない。無政府をいえば、「国界」や家族主義を排除するのはいうまでもないことである、とする。

そして、無政府共産の他に綱領として入れるべきは、宗教を廃止することだとする。なぜなら、宗教は強権を保護するための利器であり、人々を安んじて強権に服従させてしまうからである。宗教を排斥することが、人々をして強権に抵抗することを考えさせる、とする。

(四) 無政府党は建設の事業を想定しているか

「社会党約章」では、「事業」として、「鼓吹・破壊・建設」をあげるが、「建設」について、劉思復は疑義を述べる。即ち、無政府党は心力を尽して強権を打倒することが第一であって、何の余力・全財もないのだ。時勢に迎合して「辦事」をいうのは、貿易会社や政党と同じだ。無政府党が工会を組織したり、学校を創ったりするのは、あくまで、主義の普及をはかる伝播事業の一種である、とする。

(4) 無政府党に戒約はあるべきか

「社会党約章」では、「官吏にならない、議員にならない、政党に入らない、軍警とならない、宗教を信奉しない、族姓を名乗らない、結婚しない（すでに結婚した者は二人の同意で夫婦名儀を解約する）」といった「戒約」を定めていた。⁽¹⁹⁾劉思復は無政府党は絶対の自由を宗旨としているのだから、戒律は設けるべきでないし、道德問題と革命運動は弁別すべきである、とみなした。とりわけ、軍人社会に運動するのが最も重要であるのに、自ら運動の方途を閉ざすべきではない。軍人が無政府党から拒まれれば、必ず無政府党の敵となってしまう。これでは、革命を実行しようとして、かえって、革命の敵をつくり上げてしまうようなものだ、とする。

註

- (1) 『响沫集3』（一九八一・十二）
- (2) 狭間直樹『中国社会主義の黎明』一九九頁（一九七六・八）
- (3) 『民立報』一九一一年八月十五日
- (4) 一九一二年十月十五日より十七日までの三日間にわたる演説。
- (5) 鈴江言一『孫文伝』三四一頁（一九五〇・七）
- (6) 江亢虎（一八八三—？）は原名を紹銓といい、江南省弋陽の人。彼の思想については、曾榮英「民元前後の江亢虎和中国社会党」（『歴史研究』一九八〇・六）及び呉相湘「江亢虎和中国社会党」（『現代中国史叢刊』第二巻、一九六〇）がある。
- (7) 呉相湘によれば、江亢虎の名前は、浙江巡撫增韞によって、彼の言論の禍は洪水猛獸より甚しいと称されたことに由来する

という。また彼の著作『洪水集』も同様の由来をもつ。

- (8) 曾榮英によれば、「中国社会党規章」は、『天鐸報』一九一一年十一月二十四日号に登載。
- (9) 呉相湘によれば、『社会党日刊』一九一二年四月四日号に登載。

- (10) 『民立報』一九一二年十二月十九日より二十三日

- (11) 「答江亢虎」（『民声』第八号、一九一四・五・二付）

- (12) 「答道一」（『民声』第三号、一九一三・十二・二十付）

- (13) 『新大陸通信片』第十一期に登載。

- (14) 「社会党縁起及約章」（『民立報』一九一二年・十一・二）沙淦の「對於中国社会党第二次聯合会感言（民立報・一九一二年・十一・十五）」によれば、江亢虎の発した「重大問題」が江一人の喚起したことであり、国家存立を妨げない純粹社会主義とは国家主義に対して純粹であるにすぎず、無政府主義に対して純粹といえるかどうか疑問であるといった指摘がなされている。

- (15) (12)に同じ。

- (16) 「社会党縁起及約章」

- (17) 「答案無一」（『民声』第十三・十五・十六・二十号）に於いて、劉思復は社会党創設者の一人である案無の質問に答えている。案無は「社会」を「家族以上国家以下人類の組合」と捉え、無政府とは国家をなくすことであり、共產とは家族をなくすこととみなし、社会があるだけで（『有社会』）国家と家族のない状態を「無政府共產」としている。案無において「社会」を理想化することが行われていて、社会党と命名したのは、おそらくそれに由来するであろう。

- (18) (16)に同じ。

- (19) 劉思復自身はこの「戒約」を心社の影響下に成立したものであるとしている。確かに心社十二条のうちの七条と全く一致した条項が掲げられていることは事実である。

（一九八二・十一）